

み業に倣って行う奉仕

年間第29主日 B年

私たちは皆、学校で自分の国の歴史を学びます。しかし、学んだ歴史と実際の歴史とは多少違うかもしれません。教科書を監修する政府は、子供たちや若者に、実際に起こった出来事を、常に正確に伝えようとしていたわけではありません。国の不名誉とか、恥になる出来事があれば、適当にそれを見逃すでしょう。しかし例外はあります。最も古い教科書と言える四福音書はその例外です。福音書が書かれたとき、初代教会の中心的な権威を持っていた使徒たちによって監修されたのですが、福音書には、時々、使徒たちの恥になるような出来事が書き記されています。それは、一つのことを明らかにするものです。すなわち、使徒たちにとって、いちばんの関心事は、福音書の中に英雄として現れることではなく、救いの歴史の本質的な出来事を伝えることでした。

それは、今日の福音に明らかに示されています。ヤコブとヨハネについての話です。彼らは熱血漢で、主イエスから、「ボアネルゲス」、つまり「雷の子ら」と呼ばれていました（マコ3・17）。彼らは、十二人の使徒の中から選ばれて、ヤイロという会堂長の娘のよみがえりを目撃し（マコ5・41）、イエスの変容の証人にもなりました。聖パウロはふたりのことを、エルサレムの教会の柱、おもだった人とみなしています（ガラ2・7-17）。さらに、ヤコブは使徒として、主のみ名のために、最初の殉教者となりました。それに、ヨハネは、御父からの、永遠の御子の誕生を眺める、聖霊から驚の目をいただき、その誕生を後の時代に伝える聖霊の賜物をいただきました。ヨハネのおかげで、私たちは、永遠から生まれた方が、私たちの救いのためにマリアから生まれ、人間の間にご自分の住まいを定められた方と同じであると、知っています。それにまた、いずれ私たちの究極的な住まいとなる新しいエルサレム、永遠の都の城壁の土台には、ほかの使徒たちと共に、ヨハネとヤコブの名前が刻まれています（黙21・14）。つまり、ヨハネとヤコブは初代教会の柱であるほかに、永遠の都、エルサレムの土台でもあります。ですが救いの計画を定められた神の知恵に照らして、ヤコブとヨハネは何も分かっていないじゃないか、失格だと考えられる時もありました。

ヤコブとヨハネは、おぼろげながらも、最初からイエスの内に、御父からの知恵と愛が注がれているのを認めていました。しかし、イエスがエルサレムに赴く途中、村に入ろうとすると、サマリア人たちが歓迎しないのを目にしました。そのとき、ヤコブとヨハネは主のみ心に背くような言葉を口にします。「天から火を降らせて、彼らを滅ぼしましょうか」（ルカ9・55）と。その時、憐れみ深い主の心はまだ彼らのうちに根をおろしていませんでした。また、ほかの時には、ふたりはある願いを持って主に近づきます。「栄光をお受けになるとき、私どもの一人をあなたの右に、もう一人を左に座らせてください」と。ほかの使徒たちは、その願いを聞くと、ふたりに憤然とします。ほかの弟子たちも、主の右と左に座りたかったのです。実はこの人たちこそ、福音書について責任を取った人たちなのです。彼らの内に起こった、この大きな変化を明かにすることによって、信仰のうちに主を受け入れるなら、私たちの内にも似たような変化が起こり得ることに気づかせたかったのでしょう。

今日の福音の対話に気をつけてみましょう。ヤコブとヨハネは、主が栄光をお受けになるとき、そのそばに座らせていただけるように願います。これまで長い間、主と一緒にいたにもかかわらず、ふたりは弟子としての振る舞いについて何も悟っていません。そこで、主は忍耐深い養成の仕方を示されるのです。後日、ご自分を十字架につける人たちのために、御父に赦し

を願います。その理由は、彼らは何をしているかを知らないからです。今回主は、ヤコブとヨハネの心にある野心を赦します。彼らが「何を願っているのか」分からないからです。それで、真の栄光へ導く道が何かを教えられます。「わたしの杯を飲み、わたしが受ける洗礼を受けることができますか」と。彼らは主の問いかけを理解できなかったでしょう。しかし、主が言われることなので、主の杯を飲むことと洗礼を受けることは、最高善に違いないと信じたのでしよう。主の導き方と使徒たちの主への信頼によって、彼らは栄光と神に倣う道に至るのです。

後になって、ヨハネはそれらを見事に悟り、彼が自ら言う「主の愛する弟子」に私たちもなれるように、その悟りを伝えてくれました。ヨハネによれば、神から私たちへの最初の奉仕は、無から、存在への呼びかけでした。そうした奉仕は、無からの「救い」です。それは神のみ言葉である御子によってなされました。「できたもので、み言葉によらずにできたものは、何一つなかった」（ヨハ1・3）と。最初の、創造という救いの奉仕は、さらに偉大な奉仕、つまり、神の命に与るように呼ばれるのです。ヨハネはそれを最後の晩餐のイメージによって言い表します。主の受難と死の実りを意味するご聖体は、主が使徒たちの前に跪いて足を洗うという象徴のもとに現れるのです。御父は、御子をとおして、僕として私たちの前に跪き、ご自分の命に与らせてくださるのです。このようにして存在という奉仕が完成されます。

たとえ主の杯を飲み、主の洗礼を受けるという招きを、完全に理解できなくても、受け入れるだけの価値があります。聖霊に強められて、私たちは皆、自分の生活を奉仕として生きることができるからです。奉仕には、何らかの創造が伴うものです。人間の仕事は創造的です。台所では、食べ物が、事務室では書類が、工場では製品が生まれます。そのように、創造者である神に倣って私たちの奉仕が行われます。また、生活には種々の苦しみが伴います。それらを受け入れることによって、私たちの奉仕は、御子の十字架をとおしてなされた御父の奉仕に倣うのです。その度合いに応じて、これまで分からなかった十字架の神秘を少しずつ悟っていくでしょう。聖霊は、聖パウロのように十字架だけを誇るように、私たちをも導かれるのです（ガラ6・14）。

J. E. ペレス・バレラ S.J.